



## I はじめに

分科会基調は、討議課題をもとに協力者から提案された。

現代において、インターネット上に、嘘や差別、偏見、間違った情報、フェイク動画が広がっている。何が正しいかわからない時代だ。その中で、排他的で人々の分断を煽る内容、そこから生じる様々な課題があり、差別意識や偏見と結びつき、争いや対立の種となっている。そのような状態をなんとかしていきたいという議論を分散会で深めたい。

人間というものは生活している中で、自分が被害を受けている時は敏感に感じるが、自分が加害者になっている時は気づくことが難しい。自分の何気ない言動が相手に不快な思いをさせているかもしれない。SNS、インターネット時代において、簡単に加害者になってしまう。正しく情報を読み取り、正しい知識を学び、差別に気づき、差別とたたかい、差別を許さないことが重要だ。国際交流をしている団体からのホームステイで、ミャンマーからの留学生との出会いがあった。HPには本名を掲載しないということを知った。インターネット上で名前が出ると、帰国した際、国内戦状態にあることから、命の危険にさらされる可能性があるのだと言う。ニュースでは聞いていたものの、目の前にいる人がそのような状況下におかれているということ、身近に感じる事ができた。出会いがなければ、よその出来事で終わるところだった。

今回、実践を通して、皆と共有する中で、議論し合い、より自分の事として深く考える機会としたい。二日間で様々な背景を知ることが、自分事としてとらえる大きな一歩となる。人間として、お互いの基本的な人権が守られる、差別のない社会をつくるために、本日の会がある。様々な意見を出して交流してほしい。

この後、討議の柱①②③⑤が確認され、報告・討論に入った。

## II 報告及び質疑討論の概要

### －報告1－⑩

「もう1回謝る。本当にごめん」

(大分県人教)

報告者は、以前は祖母の被差別部落への偏見に対して、「どうせ変わらない」という決めつけから諦

めていた。しかし、それが自分の差別性だと認識する。教員として学び続けること、出会う子どもたちに寄り添うことを大切にしてきた。子どもを決めつけ、きつさや困りに寄り添えていなかったことに改めて気づき、自分自身の差別性に向き合っていく。

### －主な質疑と意見－

**愛媛** 報告を聞いて元気をいただいた。自分も寄り添うことが大切だと思うが、難しさも感じている。報告者が寄り添うということはどう感じているか聞きたい。また、仲間づくりで取り組まれている中で、報告者と他の教員集団との関わりを知りたい。

**報告者** 寄り添うことは、言葉でわかっているものとても難しいと感じる。立ち歩くれんさんの気持ちを考えていなかった。周りを困らせていることに気を取られ、れんさんのことを考えていなかったと反省する。その後、「どう思う？」と、れんさんの言葉や気持ちを聞くことを徹底した。「別に」「あ、そう」だったのが、だんだんと自分の気持ちを言うようになった。他の教員との関わりでは、このようなエピソードがあった。8月の人権学習の平和事業では、平和についてVTRを作り、当日流す取り組みをした。れんさんは、画面に映る役割だったが、VTRを流す直前にトイレに行き、VTRが流されている間、帰って来なかった。他の教員が気づき、「れんさんが歩いていたよ」「VTRの自分に恥ずかしかったのではないか」と教えてくれた。「こうなんじゃないかな」とあったかい気持ちで見られる教員、アットホームな職場である。

**大分** 報告者が思い込みをしたことを子どもたちに謝ったこと、そんな報告者の姿を見たからこそ、子どもたちも素直に自分の思いを出すようになったのではないかと。クラスの子どもたちのその後の変容についてくわしく話を聞きたい。

**報告者** 子どもたちも、今は、6年生になっている。れんさんは本音を言えるようになった。教科書を貸すと「ありがとう」と言う。自分は、授業の時に「何を言ってもいい、失敗しても大丈夫」と伝え続けている。担任自身の失敗したことを話そう、さらけ出そうとすると、子どもたちも言ってくれるようになった。「おれ、先生の失敗談好きやわ」と言ってくれる子もいる。

**兵庫** 報告者とれんさんのかかわり、報告の「真剣なまなざしで聞いていた」の後で、対等な関わりとなった時のくわしい話を聞きたい。れんさんの家庭背景とか、家庭とどう連携してきたかについても聞きたい。

**報告者** れんさんとの関係、周りがどう影響されたか、直接周りの子に聞いたわけではないが、お互いにお互いを見る目がマイルドになった。れんさんが

学習に参加していない時に、担任よりも先に周りの子が、「れんさん体調わるいん？」と声を掛けたり、れんさんが「分度器わすれた」と言った時に、「早く言ってよ、貸すよ」と自然に声を掛けたりする。6年になって、あたたかい声掛けが広がっている。3年時は落ち着かず、トラブルになるたびに報告し、回数が重なると、「またですか？うちだけですか？」と保護者から聞かれたことがあった。そのため、「れんさんが漢字を上手に書けてきました」と良いことも併せて連絡することで、保護者と関係づけるようになった。

**宮崎** 大阪に勤務していた時には、同僚から「家庭訪問が大事」と助言をいただいた。言われるがままに取り組み、当時は自分の思いがなかったと反省する。今、れんさんに似た子が学級にいる。本人も保護者も、学校に不信感がある。その家庭からバーベキューに誘われたことをきっかけに思いをいろいろ聞いたから、あらためて家庭訪問が大事と気づいた。報告者は部落問題学習で悩んだと言われたが、報告者と祖母の関わりを踏まえ、報告者はどのような授業を受けて変わったのか聞きたい。また、学期ごとの差別解消の取り組み、年間計画などについて聞きたい。

**報告者** 小学校の時に、別府的ヶ浜焼き打ち事件を聞いた。普通に住んでいる人の家を焼くの？信じられないという心情を持った。中学では、就職や結婚差別のことを聞いた。自分も教員になって、自分の教わってきた先生たちが、計画立て、系統立て、学びを提供してくれたのだとわかる。本校では、教育課程に位置づけ、道德の資料の中から、差別解消に活かせる取り組み、公正公平の教材を使っている。

**大分** 報告者の同僚である。困りのある子どもと寄り添うということを校内で実践してきた。少人数の学校だが、自己肯定感が低く、いろいろな背景を持っている子が多い。私は、「この子たちに寄り添って」と職員に話してきた。ただ、言うのは簡単だが、大変なことだ。れんさんのような子を、どうしてそうなるかではなく、どうしていくか。報告者は、自分に自信を持つことのできる学級づくりをされたと思う。そして、今は、報告者の実践を全校に広げて取り組んでいる。教育委員会からの人権学習の依頼で、資料をつくることにこだわった。学期に一度、授業を行い、教材の中の差別性に気づいてほしいというねらいでやってきた。学校を異動して、あるとき、授業の様子を見に行った際に、子どもたちがいきいきと自分の気持ちを言えていたのに驚いた。教員集団が本気で取り組んでいることがわかった。

## －報告2－①

「魚島へ行かせてくれてありがとう」

(愛媛県人教)

島留学が始まった当初は、最初の2週間で登校渋りが始まった。留学を断念する子や課題を抱える子に対して、関係者は、今後同じような思いをさせまいと、子どもたちの個人のペースに合わせ見守ろうとしてきた。その結果、自己実現や人とのつながりを感じながら変容していく子どもたちの姿が見られた。

－主な質疑と意見－

**兵庫** すごく違う文化の土壤に、違う子が入るということで、外国つながりの子の取り組みをしている私にとって、シンパシーを感じる。島民の方から、他から入ってくるということに対して反対はなかったのか。

**報告者** 離島留学に島民が関わっている。調理員、寮母さん、いろいろな人が関わっている。ご意見あるところだと思うが、やってくれる、喜んでくれていると思う。1年の女子で、教職員がどう関わっていけばよいか悩んでいた。その子はギターを弾く子だったので島のある場所で練習していたら、島の漁師が、「よー、ギター侍」と声を掛けてくれたことがあった。島民は、あたたかい声掛けをしてくれる。

**兵庫** 寄り添うこと、本音を聞くことの大切さが語られている。常日頃気をつけているが、うまくいかない、それでも寄り添うの繰り返し。実践を通して、大切にされている、気をつけていることは何か。これをすると打ち解けたという手立てがあれば聞きたい。成長を見取って、卒業後、島から出て行った時に、その後のつながりはあるか。

**報告者** 留学が始まる以前は、魚島の子の3人だけだった。全員が職員室に来て、おはようございますと挨拶し、きちんとした時間の流れがあった。留学が始まって、そのスタイルで進むと思いきや、それでうまくいかないということに気づいた。こだわったらあかんと思い、時間がかかると思うが、ゆとりをもって対応してやっていこうと取り組んだ。離島留学を成り立たせて、魚島でうまく行って、戻っていく時に、戻ったところで求められる力が魚島でついたのか、つけられるのかということは、これからの大きな課題。卒業生のほとんどが、魚島に帰ってきてくれ過ぎ、また帰っていった。

**協力者** 教職員が変わったきっかけは？進さんの以前の様子をつかんでいるか？

**報告者** 一緒に過ごして、急激に変わるわけではないので、丁寧な対応が必要だと思う。以前の進さんは、放課後に一時間と時間を決めて、学校に行くことができていたが、同級生がいる教室に入ること

には抵抗感があったと聞いている。

**大阪** 留学制度で、自分の故郷から留学してくるにあたり、島を第二の故郷として思えるよう、地域とのつながりを持たせられるような取り組みを教えてください。子どもたち同士の居場所づくりをどうしているか教えてください。

**報告者** 島の中を案内する。ヒラメの稚魚を一万匹放流した。一学期、いろいろな行事を行った上で、二学期、島の運動会を経て、島の子になっていく。子どもたちがそこからつながり、落ち着いて学校生活を送っていく。島の中で、飽きがこないようにイベントを行い、居場所になるようにしている。離島留学の子をピックアップすると、島の子が加わっていないことに気づく。留学で来た子どもたちの寮の行事にも、島の子を招く。みんな島の子と考えることが大事だと気づいた。

**福岡** 留学制度は私の島にもある。通えることが前提。合宿型ではない。島に留学する子どもたちの中で多く見られる傾向や子どもや保護者の思いは？

**報告者** 見学日を設け、留学を希望する家庭の保護者と子どもが参加する。面談で、話を把握する。様々だが、多い傾向は、以前の学校に通えていない、集団になじめない、進学による環境の変化が不安だという事例が多い。離島の生活に希望を持ってという子どももちろんいるが、適応しづらい、通えていない子ということが多い。

**愛媛** 保育園でも、行きたくないなという子が増えている。保育園では、遊んでいればいいと思えるが、小学校になった時に、行かんといけんのよと、保護者の気持ちの階段が、子どもにとって、大きなものになっている。そのような子どもには、人からあたたかく見守ってもらい、いままで空いていたところをほめてもらえる、埋めてもらえるということが大切だ。関わってくれていることが、子どもたちに伝わる。そうした経験を持って社会に出ていくと、大きなところに行こうが、小さいところに行こうが、やっていけるという自信につながるのではないかな。それが寄り添うということではないかな。保育園でも、いろいろなことを吸収した子が、その後なんとかがんばっている現状がある。

### －報告3－⑭

「わたし、力になる」～サクラの大きな成長～  
(大阪市人教)

入学当時から母と祖母の力が強く、不登校気味だったサクラさんが自分で学校に行き、生活習慣を見直すことに繋がった実践。支援担当や担任、人権担当など学校で関わる人々と、SC、SSW、医療なども関わり、親子に寄り添う取り組みの中で

母子や祖母が変容していく。

### －主な質疑と意見－

**福岡** 低学年の頃から入れなかったということで、様々な教員が関わったということだが、私の学校でも入れない子を別室対応して、週二回行っている。どうやっていこうか考えている。別室登校していた時に、本人がいない教室で、その子の存在をどう話し、つなげていったか。いない場で、どうつないでいくか詳しく聞きたい。

**報告者** つなぎに関して、人権担当だけでなく、担任、学年団の思いを聞いた。学校に少しでも来られればということやってきたので、別室に担任に来てもらう、他の子どもに遊びにきてもらうようにした。別室にいることを、クラスで「サクラが来てるよ」と伝えてもらった。「いま一緒に過ごせないけど、できることをやってるからね」と周りに伝えてもらった。どう伝えるかを、祖母、母と確認を取りながら進めた。5年のアオイは、学校に来られないことが続いたが、ちょっとずつ教室に顔を出せるようになった。周りの子には、「体調が悪いから学校に来られてなくて、別室で学習している」と伝え、リモートで顔を見せてくれる。学校に来られるようになると、周りの子が手を差し伸べ、あたたかい声掛けができていた。担任がつなぐのではなく、子どもたちが自然と「教室おいでよ」と連れて行ってくれた。

**兵庫** 誰一人として取り残さないという思いで、サクラさんをここまで連れてこられたということで、感動した。特別支援担当とか、人権教育主担とか、他県なのでピンとこない。SSC、SSWなどの関わりはどうか。

**報告者** 特別支援担当は、子どもたちの学級での見守り、支援ということで、学年に一人、担当がついている。人権教育主担は、部落学習、外国人学習をしている役割。学年で困り感を持っている子とか登校支援とか、家庭面でのサポート、地域とつなぐ役割を行う。

**協力者** 原学級保障という意味で、特別支援担当は重要な役割を担っている。

**滋賀** 子どもの力ってすごいな、教員ができないこともつないでくれる。できへんと言っても、その子どもを支えているのは、報告者だと思う。報告者はよくやっていると思う。報告を聞いて、家庭に入り込んでいると感じる。家庭訪問を続けている現状だと思うが、祖母、母がいて、それぞれの意見が違ふということで、学校で困るということがあるのでは？具体的に悩みを教えてください。

**報告者** ずっと悩んでいる。やはりサクラの気持ち第一だが、サクラの思いを聞いても、祖母か母の

顔をうかがうのが第一印象。祖母と一緒に来ているので、本音を聞き出すことが難しかった。サクラから意図的に離れてもらうように進めていった。祖母は「一人で心配じゃない？先生に言いや」と心配していたが、サクラが「おばあちゃん帰っていいで」と言うこともあり、成長してきた。母はサクラを登校させることが難しいと思っていたが、「周りの子と一緒にいてほしい」という思いは学校と共通だった。思いを一つにして母と相談しながら、進めていった。母子が二人でやっていけるよう、できるだけ母の気持ちを大事にするようにした。そうはいつても、祖母の思いもあるので、祖母とも話をするようにした。

**大阪** 支援の子やからと、担任が特別支援担当に丸投げする事例もあると以前聞いたこともあり、自分の中でもやもやしていた。報告を聞いて、特別支援担当やいろいろな教員が関わっていることが、すばらしかった。子ども同士の関わりが素敵やなと思った。周りの教員から本人への働きかけがあれば聞きたい。

**報告者** 現在、報告の子どもたちの6年担任をしている。現在、サクラは、周りの子との関わりの中で成長している。アオイとも同じクラスで、できることをしている。教室とか学校では表現しにくい子もいる中で、クラス全体で受け止める雰囲気、認め合えるなかまという雰囲気ができている。そうはいつても、プリントができないから学校に行きにくいという時もある。「今日、来られなさそうや」ということを日々、教員同士で伝え合いながら、「そういうことでいいんやで」と声を掛ける日々が続いている。

**大阪** 思いを大切にすることが実践されている。言うはたやすいが、実践することは難しい。組織として、平野小でやられていることが、すばらしい。サクラ、保護者の思いを受け止めるということが、なかなか難しいと思う。学校現場においてこうあるべきと発言があり、ややこしい保護者だと感じる人もいる。先生方は、何かのきっかけがあって大切だと思ったのか、もともと大切だと思っていたのか、教えてほしい。

**報告者** 教職員が同じベクトルを向いてできているかということ、できていないこともあると思う。学校としては、これが大事だと、人権担当が伝えているが…。子どもと保護者と関わる中で、「ここまでする必要あるんか」という思いを持つ人もいると思う。月一回の職員会議の場で、様々な子どもたちについて共通理解を持つ場がある。具体的な事案を出して、これを大事にしていきたいと確認し、教職員がしんどくならないように、一方で、子どもファーストでやっていけるように伝えている。学校で大事なところを、その都度その都度、確認していきたい。

**協力者** 報告者との打ち合わせの中で、教職員の入れ替えがある中で、どのように伝えているのか聞いた。年度初めのときにしっかり確認した上で、その都度その都度、伝える機会を持っているとのこと。

#### 一日目総括討論

**協力者** それぞれ、子どもに寄り添うこと、その難しさ、なかまづくりの話があった。その中から、私たちは何を学んで、どのように変容していったのかということが、大きなテーマとして底通している。どの報告にも、学校・園と家庭、関係諸機関との支援の連携の部分も語られていた。私たちが進めている人権教育は、カリキュラムとして備えられているものもあれば、その時の生の声に合わせてこういうことが必要ではないかと選び取って取り組んでいくことが大切だということも語られた。子どもたちにとって安心できる場、居心地の良い場に着目しながら取り組まれたことも報告された。参加者の日々の実践につながるのだと思われる。参加者の現状や経験を、今日の報告と結びつけて語っていただければ、うれしい。

**三重** 過去の全人教大会で自分が報告をした時に参加者の方が語ってくれたこともあり、自分も話したい。自分の6年の学級に、低学年の頃から心が通い合わなかった二人の子がいる。5年のある日、BがAに「このくそやろう」と言うことがあった。ただ、Bが、私に「先生、決めつけしたった」と自分で振り返りながら言ってきた。その日は、相手が何もなかったんだけど、自分が決めつけて言ってしまったことに気づいたのだった。BがAにそのことを言うと、後からAはいい気持ちだったと言ってくれた。ちょっとずつ変わるところがあって、6年になって、Aは自信を持って自分を語ることでできてきた。放送で言う時にAは「うっ」と止まることもある。がんばってるAのことを応援するBがいる。差別は決めつけから始まっていく、差別は自分の中にあつたんやということを使うようになった。する側の問題とリンクして、子どもたちが気づいたことを伝えたいと思った。自分も隣に部落の地区があって、私も祖父から「行くな」と言われていた。報告者は、どうせ変わらないとして自分の祖母を差別していたかもと言われていた。自分はそのままで考えていなかった。自分にとって課題ができたので、今日は参加できてよかった。

**報告者(大分)** Bくんが気づけたことはとてもすごいことだと思う。大人の私でも、難しいと思う。人権の勉強をして、少しずつ気づけてきた。小学生で、自分で見つけただけでなく、先生に伝えたということで、先生と信頼関係ができていたんだろうと思う。その話を聞くことができて、良かった。

大分 大分の報告でこの子をなんとかしたいと思ったのは、他の保護者から「この子よくないことをしてますよね？困ってますよね？」と言われたときに、腹が立ったからだ。被差別な状況にある子に、自分を重ね、悔しいと思った。報告者の皆さんは、最初からこの子に寄り添おうと思ったのではなかったのではないか。それぞれ向き合おうと思ったきっかけがあるのではないか。それを聞きたい。

報告者(大阪市) 平野小、引継ぎがていねい。支援が必要として、見る機会が多かった。サクラに限らず、いろいろな子にいろいろな課題があるということを知ることから始まった。赴任した当初からサクラの話が出ていたので、担任を持ったらどうか学級とつなげていきたいと自然に思っていた。自分だけではできないので、人権担当とか特別支援担当の力を得ながら、取り組んでいる。

報告者(愛媛) 9つ席があるが、毎日埋まっている。元の地域に帰ったときに、半分も埋まらないんじゃないかなと思う。スマホをいじっていて「いい加減にせーよ」とも思うが、時間をつくって学校に来させようと思っている。それが自分の中でエネルギーになっている。

大阪 自分は、教員歴は浅く何もわからず参加したが、熱い気持ちを聞いてよかった。今、2年の担任をしているが、1年の時から、母と子どもが親離れ、子離れできない事例がある。昨年は、一日中母がいる状態。学校に要望が多い。なぞり書き、遠足のときには車イスを希望する。特別支援担から話を聞き、今日の報告を聞いて、本人の意思、本人にとってのベター、何がいいのかを考えたい。友達が、その子と遊んであげているというように見受けられる。なかまづくりの手立て、支援をどうすればよいか話を聞きたい。

報告者(大阪市) 保護者の要望を聞くのはわるいことと思わない。受け止める中で、これは後々こう返していったほうがいいというのを、自分だけでなく、教職員で確認しながら、話を伝えている。どこまでやるのがベターか、日々悩んでいる。立ち返るところは、大阪市人教の中で聞いた、目の前で困り感を感じる子がいたら、何かやってあげたいと思うことを大切に、考えること。「やりすぎちゃうんか」と思っても、職場の同僚とできることを確認しあう中で、やっていきたい。仲間づくりでは、「ありがとう」と「ごめんね」の二つが大事だと思い、その大切さを子どもに伝えたい。子ども同士でつなぐ、接着剤の役割は、その場にいる教員だと思う。

大阪 サクラと長くかかわってきた。友だちとどうつながっていたかという、サクラ自身がコミュニケーションをとれる子だったので、オンラインゲー

ムを友だちとしていたという話も聞いた。他の子とのかかわりの塩梅を考えながら、対応した。

大阪 自分が伝えられなかったことを、別の教員が保護者に伝えてくれた。別室対応で、「別室で頑張っているよ」、素直に「よかったな」と他の子に伝えられたことがよかった。それを言えるのは、余裕を持ってたからだ。別の教員が支援してくれるので、その余裕が持てた。同じ目線でやっていくことの大切さを、この場に参加して考えさせられた。

大阪 子ども同士をつなぐことが大事。勝手につながれる子もいるし、つながれない子もいる。先生が接着剤の役割を持つことも大事。遊びをしてあげて、自分自身が、その子と遊ぶ中でその子の興味がわかり、わかったことを他の子に伝えていくこともした。手立てを明確には話せないが…。

神奈川 自分も差別しているかもしれないと思うことは大事。教職員の人権感覚を磨くという意味で、報告を聞いて考えさせられた。地域との連携も大切な視点だと思った。保護者との連携も視点をもらい、横浜市に帰ったらやっていきたい。子どものバックボーンを大切にするという意味で参加してよかった。

大分 子どもたちのつながりをどうつくっていくか考えたい。別室登校している子がいるが、つながれていない。寄り添うというのを、どうやっていけばよいか。気持ちを聞くことがスタートだが、その子が内側から変わっていく力をつけさせるために、考えているところだ。報告を聞いて、ありがとうと言いたい。

協力者 内側から力をつけるということについて何か話はあるか。

大阪 なかまづくりに関して、周りには「教えないで」と言っている。娘が発達障害で、学校行くのが楽しくないとふだんから言っている。先生がだれかを娘のところに来させている。友だちは教えることになるが、「それがいややと思う」と娘は言う。気持ちはわかる。自分は、教員として、授業では「困ったら聞くようにし」と子どもたちに伝えている。周りから見て、その子はできていなかったとしても、「考えているかもしれないから教えてやらん」として声を掛けている。聞けない子もいる。「ここがわからないからおしえて」と言えるように聞ける力をつけることも必要。上下をつくるなかまづくりではなく、「困っている」と言われているからそこに助けに行くというなかまづくりが大事。

福岡 先輩から言われて大事にしていることを伝えたい。「OOくんが言うこときかんよ」とある子が言うのは、それを伝えたいのではなく、先生はこの

子はできていないということで、その子にばかり焦点を当てているので、「もっとわたしのことを見て」ということを言っている。「あいつだけ」とならないように、教員は、手のかかる子ばかりでなく、影でがんばっている子にも視点をあてていくことが大事。それを過去に言われたことがあるので、今お伝えしたい。

#### ー一日目まとめー

**協力者** 自らの差別性を問いながら、子どもとの関係の中で自分を振り返り、それを子どもたちに伝えるという報告、いろいろな困難を持っている家庭や子どもとの関わりの中で、成長する子どもに寄り添っていくという報告、親子をつないでいく、子どもたちをつないでいく、教職員がつながっていくという報告が話された。明日も二本の報告を受けるが、今日の話をつまえて、分散会の討議につなげたい。

#### ー二日目基調提案ー

**協力者** 昨日の討論では、子ども同士をつなげること、決めつけは差別につながることに、寄り添うことの意味、関係機関と連携しながら支えていくことがあげられた。今日も、聞いてよかったと思える分散会にしていきたい。

#### ー報告4-⑫

こども日本語教室みきっずとして子どもたちと共に過ごし～多文化多言語の子どもたちを取り巻く状況～ (兵庫県人教)

知らない国で知らない言葉の学習を突然迫られる子どもたち。子どもの意思を尊重し、学習内容を形にしていった。1対1のペアで学習できるようになり楽しく学習する子、知っている漢字を使って学習する子が見られるようになった。運営側にとっては、ボランティアの不足、遠方に住んでいる子どもの交通手段、制度上など、問題が山積している。

#### ー主な質疑と意見ー

**福岡** 糸島にも外国籍の子どもが急増し、活動を始めている。地域の体制とはどのようなものか。今のうちに骨子を組み、対策を講じるとはどのようなことか。学校現場の職員が関わるのが難しいが、声掛けは行なっているのか。

**報告者** 学校との連携は大きいと思っている。困っていることの共有をもっとしたい。個人的に教員とのやりとりはあるが、関係性を強化していきたい。地域の自治体との関わりを増やすことで、何をしたいかわかってもらうことが必要。行政による外国人支援も必要。親の仕事に伴って来日している。地域自治体がサポートをしているはずだが、オリエン

テーションのようなものが求められる。シリアでは、落第がある。日本にはないから、学年が上がって学習が身につけていると、保護者が勘違いしていることもある。

**奈良** 橿原市でも外国からの子どもが増えてきて、職員は何ができるかと模索している。外国から来た子が参加できる県単位の取り組みはある。学校の中でも子ども達への対策をしているはずだが、子ども達の生の声を聴かせてほしい。

**報告者** 関西弁で話をするので、なんでもずばっと話す。子どもたちからは、「ルビをつけて欲しい」と言われている。優しい日本語を要求している。ひらがなは読めてもカタカナは読めない。問う場合もある。言語レベルが上がってくると、「あまり教えないでほしい」という子もいる。自分でやってみたいという気持ちがあるのでは。

**大阪** 社会に出た時に自分の文化を活かして発表できる場などはあるか。

**報告者** 子どもたちのアイデンティティにとってとても大切。三木市のイベントで紹介することがある。日本語ではあるが、演奏し、文化などを発表する場があった。教室では、授業終わりにどんな国なのか紹介しあっている。母語教育には手が回っていない。中国語、英語はできるが、ダリ語、ブルドゥ語、アラビア語の保障は難しい。

**兵庫** 外国籍児童生徒が散在している状況ではあるが、三木市では、全校の先生が集まって現状や内容を研修する場を設け、学校や地域の課題を出し合って話している。連携する中でそのような形になった。三木市人教、みきっず、現場職員、みきっずで学んでいる生徒のシンポジウムを開いて、知ってもらう取り組みをしている。子どもの居場所づくりを進めている。

**愛媛** 外国人の子は2歳までに入ると、卒園までに習得している。日本語でコミュニケーションができないと人間関係にも影響している。数名いると、日本語の指導の要求度合いが違っていて難しい。どのように教材を探しているか、良いものがあるか、教えて欲しい。

**報告者** 第一言語が習得できていると、第二言語も習得しやすい。学齢相当のものを用意するとすれば、何が知りたいか、何を知るべきかを大切にしている。語彙を増やすことや、体のことなど。フォニックスカードやダイソーに売っている動物カードなども活用している。

## －報告5－⑬

「A すごい！ありがとう！」

～子どもの顔が上がる人権総合学習～

(大阪府人連)

言葉に詰まって手が出るトラブルを起こす2年生のA。言葉で伝えるようにと促すと、「だって言葉がでえへんもん」。報告者は、みんなのために作ってきたAの葉脈しおりを見つけ、Aのつぶやく「べつに」の裏側にあるものを考えた。Aと周りの子どもたちが、人権総合学習で取り組んだ地域探検や、地域行事「ボタフェス」への参加を通してつながっていく過程が報告された。

### －主な質疑と意見－

**兵庫** ほそごう学園のことを知りたい。地域の学習として、植木産業があるのでは。1～9年生なのか。地域産業との関わり、地域学習の方針や位置付けを教えてほしい。クラスの規模はどれくらいか。

**報告者** 地域を含めて、地域学習として取り組んでいる。体験活動や出会いによって、地域の人思いに触れる。繰り返すことで、肯定的な思いを深めている。

**兵庫** 川西の中学校では、皮工房があった。皮革資料室もあった。皮の匂いを「臭い、臭い」という子がいたが、地域学習をすることで理解を深めていった。そういった取り組みが必要。

**大阪** 素直に見せられなかったAの気持ちを考えた。「ボタフェス」で葉脈しおりを景品にする、そこに至るまでに、周りの子どもたちへどのように伝えどのような関わりがあったのか。

**報告者** 作ってきたしおりを全員に渡すことが素敵だと思った。Aがみんなのために一つひとつ作ってくれたから大切に使ってほしいと子どもたちに伝えた。

**宮崎** 人権総合学習の年間計画ということで、1年生から9年生までこまかく取り組みがあるのか。探検隊やボタフェスなどの取り組みは報告者の思いでできたのか。Aとの向き合い方で、語れる範囲で、葛藤や悩み、苦しみを教えて欲しい。

**報告者** 人権総合学習は、大枠は人権担当が作った。子どもたちの実態に合わせて、学年で考え、取り組んだ。ポケモンが好きな子どもが多かったので、ちょっとでも取り組みを楽しんでほしい、探検隊というキーワードでみんな協力してほしいという思いを込めて、「ほそごう探検隊、地域マスターをゲットだぜ！」と考えた。キャッチフレーズとして、子どもたちも気に入っていて、地域探検の帰りに「地域のスターをゲットだぜ！」と言いながら、「ほんまに探検隊みたいやなあ」と関わられたのがよ

かった。ボタフェスに関して、地域で学んだことを広げてほしいと意図して考えていた。Aとのアプローチで、どんな気持ちだったのか想像することが大切と報告に書いたが、言葉で言うのは簡単だが、できない日々も多かった。Aが怒った時は、手が出ることも多く、Aに手を出させてはいけないということで、止めるのだが、私の腕の中で怒り暴れるAを見て、もっと他に何かできることはないのかな、と考えることもあった。

**兵庫** Aの変容で、人との出会いによって変わったのが素敵。その変容をねらいとして持っていた人権総合学習だったのか。これを経て、今現在、何か変化、成長を感じることもあるか。

**報告者** 年度当初に人権担当が大切にしていきたいことを話すのだが、「A はクラスの中で気になる言動をして、学習がしんどいということだけではなく、将来社会に出た時に、壁に当たったり、差別を受けたりするかもしれない子も含めてのAなんです」、という話を受けて、それが心に残っている。人権総合学習を考える上で、まず始めに、Aをどの子にするかということを考えていった。葉脈しおりのことを子どもたちが言ってくれたので、人権総合学習の中でできるなあと思って、取り組みをした。現在も、子どもたちは、「ボタフェスがやりたい」と言っている。ただ、開催時期がずれ、来年度の4月になってしまうので、3年は出られないということになった。だが、それで終わりにせずに、自分たちで作り上げる、ほそごうボタフェスを開くことになった。Aは、地産地消チームに入って、ほそかわ大根という特産物の良さを調べていると聞いた。以前は意欲がなくて周りの子に声を掛けてもらっていたが、今では逆に、できていない友だちに「今はちゃうで、やるときやで」と声を掛けていたと聞いた。

**協力者** 今のAとの関わりは？

**報告者** Aは、自分を見たら「あ、先生や、にげろー」と言って、逃げていく。それを見て、「先生、やっほー」と言いたいのかなとポジティブに捉えるようにしている。Aなりにコミュニケーションを取ろうとしているのではないか。

### Ⅲ 二日目総括討論

**協力者** 5本の報告をもとに学びを深めていく。全国のなかまをつなぐ、世代をつなぐという視点で、討論をお願いしたい。各地の取り組みを広げていく、先達が大事にしてきた実践や取り組みを受け継いでいくという意味合いで、多くの参加者から発言をお願いしたい。

**大分** 大分の報告の祖母の家での話を聞きたい。

**報告者(大分)** 祖母の家に行くまでに地域があって、そこを通ってきたら、「そこは危ないから通らないように」と言われた。何度も祖母はそのように言うのだが、差別であるのに、自分は反論できなかった。

**大分** 部落解放同盟の役員をしている。全国的に話題になっている大分市の問題があがっている。報告者の話を聞いてこれが差別を生むのだと思った。相当元気をなくしている人がいろんなところにいる。これは本当だ、これはおかしいという見目を育てる、意識を育てるのが、教育だと思う。乳児期、0歳から始めないといけないと思う。何をしてきたかが問われている。声の掛け方とか、偏見を許さないとか、公平の意識とか、お互いを尊敬できる、人権保育、解放教育、人権教育、同和教育のもとがあってから、はじめてできてくると思う。過去の全同教大会で、行間のことを語れと言われてきた。そのことを話してくれとずっと言われてきた。その人の人権感覚が教育になっているのだから、寄り添う、その次のこと、理解し合って、共感し合って、乗り越えられる力をつけていく子を育てていくことが求められる。一緒に乗り越えようと言ってきたのが解放教育だ。本音を語り合える全人教を目指したいとあらためて思った。

**福岡** 見目を育てるという話に繋げるが、学校の中で同和教育をどう進めてきたか。Aが変わったから終わったら、Aの問題になってしまう。周りの子がどう変わったか、それをどう乗り越えていったかを考える。Aをどう見ていたのか。今後の出会いの中で、これをどう生かせるのか。9年間の教育でどう育つのか。

**大阪** その子どものペースで見守っていく。どの子どもでもその子のペースがある。担任だけでなく、いろんな目で見ると仲間づくりは担任がやることだと思う。1年生に「サポートの先生ばかりいらんねん」と言われた。やはり担任だと思う。報告にあった「日本人みたいに日本語が喋れるようになってよかった」という言葉を聞いて、今の社会の問題について考える。

**大阪** 人権総合学習は9年間の取り組み。1から4年生、5から7年生、8・9年生と3つに分けたステージを設けている。地域として植木の産業がある。職人さんの子どもたちがその仕事に誇りを持っているのか。地域が良くないと言われた時に話せる力がついてるのか。反差別の気持ちを育てていく。自分の生き方を狭められることがないように。自分の言葉で自分を語る力をつけたい。子ども達の結びつき、仲間づくり、何度も出会い直すことで価値づけられていき、リスペクトすることを通して、自分の生き方を考えられる。知ることでも理不尽を

怒りに変えて、乗り越える力にしていきたい。

**大分** 大分の報告者が1年生の担任をした時、座れない子がいた。他の子と同じことができない。その子のやりたいことと、学校の仕組みが合っていない。苦しさはそこにある。その子を強制することなく、その子のやりたいことを見守った。乳幼児期からみんなと一緒にないとダメということ、大人が植え付けているのではないか。

**兵庫** おばあちゃんから隣の地区に行ったらあかんと言われていた。小学校で地域の子が並べられて泣いていた。「勉強が苦手だから夜に勉強します」と言われていた。人権教育を絶対に大事にしなければならないと思う。最近、インターネットの影響が大きい社会になっている。どんなにやっても、それに押されてしまっているのではないか。

**学生** インターネットの人権問題。SNSで極端な考え方が流行っている。外国ルーツの報告もあった。排除するという考えが流行っている現状があると思う。簡単な問題ではないと思う。子どもの権利、外国人の権利も大事。一方で、不法移民を簡単に入れると日本人が不利益になるとも言われている。教育現場の人権に対する向き合い方が大切ではないか。それぞれの人権を大切にしましょう、で終わってしまっているのが問題ではないか。少数派を受け入れるだけで終わらないようにするために、どうするかを議論していくことが大事だと思う。

**大阪** 差別する側が悪い。SNSの影響も大きい。実際の人と出会い、触れ合うことが大事。6年生の平和学習で原爆資料館の内容を辛くて見られない子達。現実とのつながりが弱いことに問題がある。別の地域を悪く言う人が悪い。「外国人」という主語が大きくなり過ぎていて、つながり、地域、先生達が意識して現実を見ていくことが大事。今は細分化され過ぎていて、自分に差別意識があったのだと気づくこともある。子ども達と一緒に学んでいかなければならない。

**大分** 自らも差別の構造の中にいる、ということ意識していかなければならない。インターネットの中で見る差別の構造を見抜く力をつける。自分事として考えるとは何か。自分は何者かと語ることが大事。自分がどう向き合うか。感情論ではなく、どう克服していくかが大事。

**兵庫** 難病で息子を送迎している。NHKの「自閉症の僕が飛び跳ねる理由」という番組を見た。自分で文字に起こして発言している子。何が一番きついか、「人の視線が怖い」と言っていた。自分たちが自覚しないとイケない。特別視しない空手の先生は、どう接したらいいかわからないから特別視しなかったという。空手を好きでたまらない自閉症の子、

シリアの子、みんな馴染んでいる。みんな互いに応援している。シリアの子が、文化が違う中でも、自然な姿を見せられるというのは、視線が痛くない環境なのかなあと思う。

**大阪** 生野区人権実践交流会があった。課題を抱えている子の変容が描かれていた。今日この討議で考えたのは、その子だけの学級学校ではないから、みんなで考えていって周囲のみんなも一緒に考えていくべきだと思った。その子をもとにした周りの変容を見つめていくことが大事。今後そのように報告文を書き加えていきたいと思った。昨日の愛媛の報告で、元々島にいた子を見れていなかったという発言があった。問題がないと思う子を逆に見ていない。気を付けていきたい。

**大分** 二日間色々考えた。いわゆるおとなしい子をどう考えていくか。命を落とした子がいた。学校に来られなかったが来られるようになって、安心してしまっていた。声を出さない子のことをどう考えるか。

**報告者(兵庫)** 外国人のことで話が参加者から出て、報告してよかったと思う。学生さんの発言があり、勇気を持って言ってくれたことに感動した。先ほどの発言で、「日本人みたいに…」ということについて。外国人からして、日本人のように、と思うことは良いことか、悪いことか。自分が英語を学んでいて、アメリカ人のように話せるようになりたい。というのはどうなのか。周りがやっていることならまた違うが、自分がそうなりたいという気持ちをどう考える？やっぱり「外国人」としてのレッテルを貼られていると感じる。助けてあげないといけない存在なのか、弱者なのか、葛藤している。外国人だから助けてあげないといけない、ということとは差別なのではないか、と思うこともある。

**兵庫** 全外教が関西学院大学であった時に、兵庫県外教ができた。今危惧しているのは、政治が貧困。外国人のせいにして煽っている。排外主義ではなく、共生していこうという考えが消されてしまっている。次男に身体障がいがある。誹謗中傷で殺されてしまう。デマをすぐに信じてしまう。SNSでの生徒達の人権侵害もたくさん起きている。取り組んでいかないと、とんでもないことが起きる。

**兵庫** 三木市の取り組みがヒントになればいいと思う。次の後継者がいない、と言うのは嘘だ。70までイキイキと働いている人が多い。人権の先達はイベントをたくさん作ってくれた。外国人はそこに参加できていないのでは？若い時に世界一周した。ペンフレンドとのやりとり。ヒッチハイクをした。地域の中にみんな入ってきてほしい。外国人の方も浴衣を着て一緒に盆踊りをしている。学校の先生が地域の自治体に具体的なことを提案して欲しい。

地域の諸問題と学校教育をつなげていきましょう。

**大阪** 学生の方からの意見を聞いて、学んで感想を書いて終わる、そんな人権学習が結構あると思う。自分もそのような学習をしてきた。何が足りていないのかと考えた。参画だと思った。学習のプロセスに自分たちの考えを表明する。地域と出会って、そこで自分たちに何ができるのか、とすることができていた。そのように課題を乗り越えていく経験が伴うことは、課題を解決していく力になる。子ども達とともにクラスを作ることができているのか。大人だけが考えてしまっていないか。誰一人取り残さない学校づくりを子どもとともにしていく。Aを深く見ることで、どんな差別が潜んでいるのかが見えてくる。それぞれの価値観を差し出していくことで周りの子たちも見えてくる。Aを設定することが必要だ。

**大阪** 自分も同じ思いだ。参画する必要がある。自分自身の失敗を語る。地域のある学校で人権教育をしたら、子どもから反発された。「なんでそんなやらないあかんねん」と言われ、やり方を失敗してしまった。自分自身も部落出身で、友だちに言われた。「いっつも周りが悪者にされているばかりで全然面白くなかった」と。考えてやったのは、「社会問題にみんなで参加しよう」ということだ。児童数がどんどん減っている中で、学校がなくなりそうだという問題を取り上げ、解決しようとする取り組みをした。子どもたちは、「地域を知ってもらいたい」と言っていた。地域のことを紹介する資料を探していた子どもたちに、以前おもわないと言われた冊子を紹介すると、一所懸命学んでいた。「やらないあかんからやる」ではない。こっちもワクワクしながらやらないといけない。報告にあったほそごうの「大枠は決まっている」は大事。子どもたちと、この状況を何とかしたいと思うことを、取り組みの中に入れていく。探究したことや考えたことが生きる力になっていくのではないか。

#### IV 分散会まとめ

最後に5人の報告者から一言をいただいてから、まとめに入った。

**報告者(大分)** 来るまでは怖かった。自分を曝け出すことも。しかし、自分自身がアップデートできた。対等な関係を築くこと。つながる中で温かい関係になること。笑顔が増える教室にしていくために勉強していきたい。言葉の端々にその人の人権感覚が現れる。

**報告者(愛媛)** 素晴らしい報告と並んで、魚島のことを報告できて良かった。自分たちの取り組みを見つめることができ感謝したい。兵庫の報告者からシンパシーを感じると言われたが、離島留学生

が来た時に、留学生が来たという目で見ていた事に気づいた。秋になってやっと魚島の子になったんだとわかった。

**報告者(大阪市)** この時間を一緒に過ごせて財産になった。なかなかできない経験だった。自分事として考えていくこと、対話が大切。言葉が出なくても、その場で一緒に考えることがその時間を共有することになると感じている。今日は欠席することになった報告者が、「一人じゃないってということが大事だ」と言っていたので、お伝えする。

**報告者(兵庫)** 何にも変えられない二日間になった。色々学ばせていただいた。教育現場のメソッドが詰まっていると感じた。人権というところで直面している。アフガンの子をシリアの子が見るとタリバンを想起して葛藤している。寄り添うことの難しさがあるが、その子の成長につながっているんだと思えた。

**報告者(大阪府)** 寄り添うということをしっかりと考えた。差別する側がそれに気づく努力が大切だと学べた。Aの行動に問題はあるが、その一面だけではない。Aについてみんなに知ってもらいたいという気持ちで取り組んだ。トラブルがあって過ごしていた時に、自分が声を掛ける前に、クラスの子もたちが一緒にやろうって声を掛けていた。二日間を通して温かい意見をもらえて、Aとの葛藤しながら向き合っていた日々が報われた気がする。向き合おうとした自分を抱きしめたい。

**協力者** 5本の報告を通して、参加者が感じたことや、この先に見えるものは何なんだろうということが、今日たくさん語られた。たくさんの方の経験や取り組みが話され、受け継いでいかなければならないという決心が変わった分散会になったかと思う。

寄り添うこととその難しさについて、昨日はたくさん語られた。今日は、その先に何を見るのかということをお聞きすることができたかと思う。特別支援のサポートのあり方、外国つながりの子たちのアイデンティティの育て方という話の中で、大人の思っているサポートを押し付けるのではなく、当事者の子もたちはどうしてもらいたいと思っているのか、そこをきちんと考えられるようにならないとだめだということが、今回の気づきの一つになったかと思う。

それからもう一つ、参画ということが、たくさんの方から語られた。社会モデルという言葉があるように、私たちが子どもたちにこんなふうには学ばせたいということより、一緒になってつくっていく中で、問題にぶつかり、それを解決する中で、乗り越える力になっていくのではないかと、最後の討議で話がつながり見えてきた。私たちがとりまく差別の現実には、未曾有の状態だ。SNSで差別が振りま

かれ、扇動する人に乗っかる人がいる。教室の中でも、大きなことを言う子に、いつも反応する子がいる。今の社会の状況に見えてしまう。子どもたちと一緒に考えることをやっていきたい。差別の現実に出会うこと、一緒に考えて一緒につくっていくこと、それが乗り越えていく力になるということが、今回の分散会で確認された。

参加者の学ぼうとする気持ちが、エネルギーとして伝わってきた分散会だった。協力者団として、討議をどのようにやっていくか考えたが、それ以上に参加者から答えていただけたと思う。報告者、参加者の皆様、どうもありがとうございました。